研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
C-51C		20-057	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門　三浦克之

題名（原題／訳）

Risk factors for esophageal iodine-unstained lesions and changing trends among Japanese alcohol-dependent men (2003-2018)
アルコール依存日本人男性における、食道ヨード不染帯のリスク因子と傾向の変化（2003-2018 年）

執筆者

Yokoyama A, Omori T, Yokoyama T.

掲載誌

Cancer Sci. 2021 Feb;112(2):734-743. doi: 10.1111/cas.14753.

キーワード	PMID
アルコール依存、慢性萎縮性胃炎、食道癌、食道異形成、食道裂孔ヘルニア	33249700

要　旨

目的：この数十年で、世界的に、男性の食道扁平上皮癌（ESCC）の発生率は低下している。本研究は、アルコール依存日本人男性における、がんハイリスク病変である食道ヨード不染帯（DIULs）の検出傾向の年次変化を検討した。

方法：2003-2018 年に色素内視鏡スクリーニング検査を受けたアルコール依存日本人男性 3858 人（40-79 歳）を対象に、明かな DIULs(がんリスクの高い病変および ESCC)の決定因子を評価した。

結果：初期のスクリーニング検査では DIULs≧5mm は 541 名（異形成 319 名、扁平上皮癌 129 名）、多発 DIULs は 640 名に検出された。DIULs と慢性萎縮性胃炎（CAG）の検出率、Pack-year（(1 日の煙草本数÷20 本）×喫煙年数)、平均赤血球容積（MCV）は調査期間を通して減少していた。一方、食道裂孔ヘルニア（HH)、Barrett 食道（CLE）およびアルデヒド脱水素酵素 2 遺伝子（ALDH2, rs671）ヘテロ欠損型は増加していた。

多重ロジスティック回帰分析の結果、高齢、Pack-year 高値、BMI 低値、MCV 高値、アルコール脱水素酵素 1B 遺伝子（rs1229984）の低活性型、ALDH2 遺伝子ヘテロ欠損型、CAG の進行は DIULs の高オッズ比と関連していた。一方で 2003-2007 年と比べて 2008-2013 年および 2014-2018 年のスクリーニング検査では DIULs のオッズ比は低かった。HH/CLE がある場合、多発 DIULs のオッズ比は低く、より近位の ESCC と関連した。

結論：2003-2018 年において、アルコール依存者の DIULs 検出は減少していた。既報の ESCC の決定因子に加えて、CAG と HH/CLE は DIULs の高リスクと関連していた。DIULs の検出減少の要因については説明できておらず、今後の課題である。